

うみとろくぞく

もっと知ってスマスイ

Suma
Aqualife Park
in KOBE

2019

6

June

特集

SPECIAL ISSUE

イルカライブ館 オープン30年を迎えて

トピックス

ガラスの向こう側
カピバラ飼育員奮闘記
～新人編～

スマスイ生物図鑑 part37

研究の窓
ウミヘビに餌を与える時間帯の検討
～呼吸回数から見るウミヘビの休憩時間帯～

出張見聞録

ペンギンのリアル足型スタンプラリー実現に向けて
～未知なる足型を求めて～

スマスイ職員名鑑

↓迫力満点のジャンプ



30周年記念企画展↑



特集
SPECIAL ISSUE

イルカライブ館オ

海獣飼育課 古田圭介

迫力満点の水しぶきに観覧席からの大歓声。須磨海浜水族園のイルカライブの魅力はイルカとお客さまとの距離の近さです。1989年3月27日に始まったイルカライブは、今年で丸30年を迎えました。1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災では、イルカライブ館駆体に大きな被害はなく、イルカも無事でした。しかし、震災直後は餌の確保もままならず、与える餌を通常の半分にする、電力や海水の使用量を抑えるなど、相当な苦勞を強いられました。地域の皆さま、全国各地からの温かい励ましを受け、被災3カ月後にはイルカライブを再開し、たくさんの方に笑顔と希望を届けることができました。

イルカライブは、スタートから2010年まで、毎年春にテーマを一新してきました。当初はプロの演出家が制作に携わり、ストーリー仕立てで展開されていま

たが、現在はその制作・演出を全てトレーナーが行っています。毎日イルカと接するトレーナーが考えるライブは、よりイルカに親しみを抱いてもらいやすい内容へと変化していきました。道具を用いて遊ぶ、水中の音や物体の形状を識別する、エコロケーション（音響定位）を利用してクイズの正解を選ぶなど、好奇心旺盛で学習能力が高いイルカたちの生態を楽しく解説する手法を取り入れてきました。

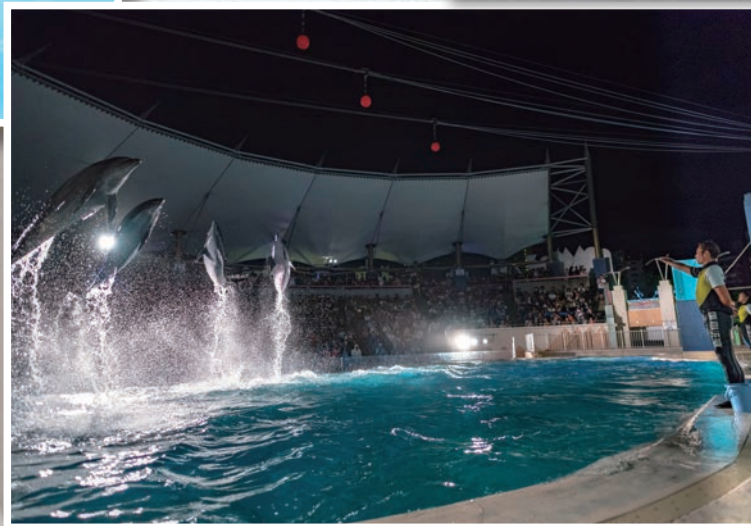
2010年には新しい試みが導入されました。ここでは主に3例を紹介します。1つ目は、人員配置です。1回のライブを行うには、イルカを扱うトレーナー2~3人、司会、音響役、お客さまサポート役の計5~6人が必要です。それまでは司会、音響役、お客さまサポート役に専属の職員を配置し、トレーナーはイルカを扱うことに専念し



↑授乳の様子。長期飼育・繁殖推進は重要な課題



↓光の演出を加えたイルカナイトライブ



オープン30年を迎えて

ていましたが、トレーナーが全てのポジションを担う形へ移行しました。2つ目は、トレーナーがプールに入る水中パフォーマンスの導入です。イルカと同じ水中空間で一体となるパフォーマンスは、お客さまを魅了すると同時に、イルカにとっても新しい刺激となりました。3つ目は、夜間のライブに光の演出を取り入れたことです。2016年からはプールの壁面に映像を投影し、プロジェクションマッピングと融合したライブを開始しました。動物の魅力を最大限に引き出すさまざまな試みは、イルカとお客さまとトレーナーの距離をぐっと縮め、当園ならではの臨場感や一体感を生み出す結果となりました。

昨今、飼育動物の長期飼育や繁殖推進が重要な課題となっています。当園ではイルカの繁殖に取り組み、健康管理面の技術向上にも努めています。また、「ヒ

トとイルカの関係」をテーマに、介在活動、海岸飼育、行動や認知能力の解析など、研究活動にも力を注いでいます。これら30年の歴史を皆さまに伝えたいというトレーナーの思いが形になり、3月23日から5月6日まで、企画展「イルカライブ館オープン30年—平成の時代とともに—」を開催しました。イルカライブが始まった1989年は平成元年。まさに平成の時代とともに歩んだ「いのちの学習」の場だといえます。当園では「ショー」という言葉は使わず、「ライブ」と呼んでいます。ここには、動物を見せるのではなく、動物が生きるありのままの姿を表現するというメッセージが込められています。イルカライブは、イルカが思考し、運動し、餌を獲得し、生き生きと遊ぶ場です。これからたくさんの皆さまにイルカが躍動する姿をお届けしたいと思います。

1

TOPIC

和太鼓松村組とイルカライブが 夢の共演「光の暮新月」



開催日=1月5日

神戸を拠点に国内外で活躍する「和太鼓松村組」の演奏とイルカライブがコラボした特別イベント「光の暮新月」を開催しました。冬の夜空に響き渡る和太鼓の鼓動とマリンバの澄んだ音色、イルカの躍動感、光と映像の演出が重なり合い、迫力あるパフォーマンスは会場を熱気で包み込み、観客を魅了しました。



↑和太鼓の鼓動が響き渡る

2
TOPIC

企画展 「季節外れの金魚展」を開催!



展示期間=1月10日～3月10日

2016年に高知県の桂浜水族館から頂いた土佐錦魚が繁殖し、稚魚をバックヤードで育てていました。夏の季語として知られる金魚を真冬に展示したのは、稚魚の時期にしか見られ

ない、体色が黒い「黒子」を見てほしいとの思いからです。土佐錦魚のほかにも、大阪蘭鰭、更紗琉金、出目金を展示しました。



↑一度絶滅した幻の金魚、大阪蘭鰭



←金魚の折り紙はボランティアスタッフの手作り

3

TOPIC

1歳のカリフォルニアアシカ 「ハヤト」を初公開!



公開日=1月15日

期待の新米アシカ「ハヤト」が展示デビューしました。当初は落ち着きがなく、初めての環境に驚いていましたが、トレーニングを通して少しずつ慣れていきました。最近は、トレーナーとおもちゃで遊ぶことで信頼関係を築いています。皆さんにも興味を持つかもしれませんので、ガラス越しにハヤトと遊んでみてください!



↑ボール種目の練習



←トレーナーと握手

4

TOPIC

国内水族館初! TikTok始めました(っぴ)!

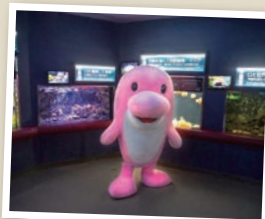
開始日=1月28日

国内の水族館としては初めて、動画投稿SNS「TikTok」の公式アカウントを開設しました。マスコットキャラクター「ピンキー」が、当園の仕事や生きものをテーマに投稿します。また、園内でのキラキラした日常風景などをテーマに投稿する、ピンキー専用のInstagramアカウントも新しく始めました。これからもスマスイの魅力をいろいろな角度から発信していきます!

▶TikTokアカウントID [sumasui_kobe](#)

▶InstagramピンキーアカウントID [pretty_pinky_so_sweet](#)

TikTok
ホーム画面→



↑公式キャラ「ピンキー」

スマスイでの日常をお届け!→



5
TOPIC

「ときめきバレンタイン in スマスイ」を開催

開催期間=2月1日～3月17日
バレンタイン時期に合わせて、定番のふれあい体験「アザラシにタッチ」にトレーナー体験とキスの体験が加わった「Love Seal アザラシに夢チュー」、オリジナル謎解きゲーム「なぞとき in スマスイ プレゼントはどこだ?」を実施しました。2つの新企画で、お客さまにドキドキの体験を楽しんでいただきました。



↑ドキドキの謎解き体験

↓記念撮影もバッチリ



祝! 20歳 ラッコ「明日花」誕生日に成獣式を開催!

開催日=2月3日

ラッコの「明日花」の20歳のお祝いに、「成獣式」を開催しました。スーツ姿の飼育員が成人式さながらのプログラムで進行し、「食べられる証書」を授与。主役の明日花が受け取らないハプニングが起こるも、来賓の「ラッキー」が代役となって見事にフォロー! たくさんの方々に見守られ、大きな節目を迎えることができました。



↑飼育員特製「食べられる証書」

↓主役の明日花



↑ハプニング発生もラッキーがナイスフォロー!

7
TOPIC

生きものスクール 「あなたも今日からサメ博士! サメの歯探し教室」を開催

開催日=2月16日

サメの生態について解説を受けた後、飼育しているサメから抜け落ちた本物の歯を、水槽の底にたまった貝殻片の中から探す教室を開催しました。当初、参加者は殻と歯の見分けがつかず四苦八苦。コツを教わると少しずつ慣れて、最終的には多数の歯を見つけることができ、サメについての知識も深められたようです。



↑貝殻と歯の区別が苦戦!



↑解説に聞き入る参加者



全園を利用して 南海トラフ地震を想定した 避難訓練を実施

実施日=2月27日

職員全員で避難訓練を行いました。訓練では安全確認の後、避難誘導や初期消火、被害状況の確認など、災害時の役割に分かれました。地震、火事、津波などの災害に対する行動や考

↓職員同士で役割分担



え、放送設備などを再確認することによって、訓練をしなければ気付かないことが多くあると知り、備えておくことの大切さを実感できました。



消火活動訓練→

8
TOPIC

スマスイ職員がさまざまな切り口から現場の裏側について紹介します。

カピバラ 飼育員奮闘記 ～新人編～

今回からお届けするのは、カピバラ飼育の裏側です。当園では現在、オスの「マーク」とメスの「ローラ」の2頭を飼育しています。この2頭の担当になって1年の新人飼育員が直面した、ある出来事をご紹介します。



↑オスの「マーク」



メスの「ローラ」↑

1 カピバラに触れない!?

カピバラというと、どのようなイメージを持っていますか？おそらく「ぼーっとして動かない」ではないでしょうか。私も担当になるまでは、同じようなイメージを持っていました。ところが、当

園のマークは違ったのです。カピバラにも個性があります。ローラは割と人懐

こいのですが、マークは警戒心が強く、知らない飼育員が飼育エリアに入ると離れた所へ行くのです。マークの警戒心を解かなければ、安定した長期飼育は難しくなります。そこで、警戒を解くためのある作戦を始めました。



当時の様子の再現



2 仲よし大作戦!!

マークの警戒心を解くために、時間があればマークの元へ行き、声を覚えてもらうために話し掛ける、給餌の時間以外でも大好物のリンゴを隠し持っておき、近づいてきたら与えるといったことを繰り返しました。また、カピバラは相手をよく見ている動物です。どうやらマークは、大きなものや動きに驚きやすいよ

うでした。そこで、なるべく低姿勢で、ゆっくりとした動きで接しました。そして1カ月ぐらいが過ぎた頃、飼育エリア内にある水路の掃除をしていると、マークが私の横に座るようになりました。その後しばらくして、ついに体を触らせてくれるようになったのです。マークの警戒心を解く作戦は大成功です。今では、歴代の飼育員が取り組んできた、ストレスをかけない健康診断を目的としたトレーニングに

も挑戦しており、体重測定などもできるようになりました。今後は、サインでケージに入るといった新しいトレーニングにも挑戦し、マークやローラと良い関係を築いていきたいと思います。



↑ローラの体重測定もスムーズに行えるように!

現在、「カピバラの面白さを伝えたい!」をテーマに、飼育エリアの解説パネルの制作にも力を入れています。カピバラたちと接する中で発見したことなども発信しているので、カピバラを見に来た際にはパネルにも注目してみてください。



↑カピバラの毛に触れる解説パネル

次号もカピバラ飼育の裏側をお届けします。とっておきのエピソードをお楽しみに!

コモンフグ

Takifugu flavipterus

海水魚

北海道～九州南岸の日本海・東シナ海沿岸、北海道南部～九州南岸の太平洋沿岸、瀬戸内海、西岸北部を除く朝鮮半島沿岸、清州島、台湾、香港。

沿岸の岩礁や砂場に生息し、体長は20cmになる。暗緑褐色の背中に多数の不規則な淡色斑を有し、和名の由来となっている。体表には小さな棘があり、尻びれは淡黄色である。外見が似ているショウサイフグとナシフグは、尻びれが白く体表の棘がないことから区別できる。繁殖期の4月になると集団で海岸に押し寄せ、波打ち際で産卵を行う。食用に販売もされているが、卵巣、肝臓、精巣、皮膚、腸の順に強い毒を持ち、主な可食部となる筋肉も産地により毒性の有無・強弱があるため、注意が必要である。

[野路晃秀]



マコガレイ

Pseudopleuronectes yokohamae

海水魚

北海道西岸～九州西岸の日本海・東シナ海沿岸、北海道南岸～土佐湾の太平洋沿岸、瀬戸内海、朝鮮半島全沿岸、渤海～東シナ海北部。

100m以浅の砂泥域に生息し、最大全長45cmになる。成長するにつれて沖合へと生息場所を移し、1～2年で成熟する。産卵期は大阪湾では12月に始まり、約3カ月間続く。夜間、小石交じりの砂底に集まり、オスはメスの腹部を圧迫して産卵を促し、メスは沈性粘着卵を塊状に産む。肉食性で、ゴカイなどの多毛類や小型の甲殻類、二枚貝などを捕食するが、摂餌量には季節変動があり、水温が20度を超えると摂食が減り、26度になると絶食するという報告がある。飼育下では活性を下げないために、通年で水温を20度以下にしている。

[水野光大]



と さ さ き ん 土佐錦魚 (キンギョ)

Carassius auratus var.

淡水魚

人工改良品種。

金魚の祖先は、約1,700年前に中国で発見された突然変異の赤いフナ(ヒブナ)であり、さまざまな体色やひれの形をした個体の交配を繰り返すことで、多くの品種が作出されている。本品種は、江戸時代に土佐国で「大阪蘭錆」と「琉金」の交配によって作出されたものにさらに改良が加えられ、明治時代に現在の形になったとされている。江戸時代は陶器製の鉢などで飼われていたため、金魚は水面から観賞するのが一般的であり、現在も品評会などでは上から見た美しさが競われる。本品種はその代表格で、左右に広がりながら大きくカールした尾びれが美しく特徴的である。1969年に高知県の天然記念物に指定された。

[磯崎祐助]



キアソファリンクス・フォアエ

Cyathopharynx foae

淡水魚

タンガニイカ湖(中央アフリカ)。

岩や砂上の付着ケイ藻類を主食とするシクリッドの仲間。オスは全長22cmほどになり、胸びれを除くひれが伸長するため、「フェザーフィン」と呼ばれる。また、営巣したオスは青と黄を主体とした非常に派手な体色を呈す。対してメスは全長15cmほどで、地味な体色をしている。オスは砂を皿状に掘った巣をつくり、訪問してきたメスに大きくひれを広げて求愛する。求愛が受け入れられると巣の中への放精が先に行われ、受精した卵をメスがすかさず口にくわえて保護をする。受精から保護までの時間を短縮することで、卵が捕食されることを防いでいると考えられている。

[小坂直也]



モクズガニ

Eriocheir japonica

無脊椎

北海道～南西諸島;沿海地方,サハリン,朝鮮半島東岸部,台湾。

ハサミに絨毛と呼ばれるふさふさの毛が生えており、これが藻屑に見えることが名前の由来である。古くから食用とされ、「ズガニ」や「ツガニ」などさまざまな地方名で呼ばれている。通し回遊を行い、成熟すると川を下り、塩分濃度の高い河川感潮域の下流部から海域で繁殖する。幼生はある程度塩分濃度がなければ生存できないため、稚ガニへの変態は感潮域で行われる。その後、河川の上流域へ向けて遡上、分散する。飼育下では脱走の名人で、エアチューブなどつかまる場所があればよじ登り、水がない乾燥した場所でも42時間以上生存することができる。

[宮地麻美]



ウミヘビに餌を与える時間帯の検討 ～呼吸回数から見るウミヘビの休息時間帯～

元須磨海浜水族園 魚類飼育課 笹井隆秀 東海大学 地俱尚哉、川崎天地、吉田弥生



↑呼吸に上がるクロボシウミヘビ



↑日中に発見したクロガシラウミヘビ



↑夜間に発見したクロガシラウミヘビ



↑昼間の観察の様子

いる写真がありました(クロボシウミヘビの写真はありませんでした)。これでは、いつが主な活動時間帯かわかりません。そこで世界中の論文を調べてみましたが、いつ餌を食べる、いつ睡眠を取るといった記録はほとんど見つかりません。そもそもウミヘビの研究者は多くなく、研究があまり進んでいないのが現状なのです。

そこで、ウミヘビはいつ活発に動くのか、いつ睡眠を取っているのか、ということ飼育下で調べてみました。

そもそも睡眠とは？

睡眠は、体構造がより複雑化した動物にとっては生命維持に関わる重要な生理機能であり、生存に欠かせない行動だといわれています。水族館で飼育している生きもので、変わった睡眠を行うのはイルカです。彼らは左右の脳を交互に眠らせることが研究により判明しています。このような睡眠の研究は脳波を利用したものが多く、脳が大きく発達した哺乳類や鳥類では盛んに行われています。ただ、脳波の測定には対象動物の大きさなどさまざまな制約があり、爬虫類の知見はあまり多くありません。脳波を利用しない方法での研究としては、例えば、リクガメやイグアナでまぶたを閉じる、四肢が脱力する、心拍数が減るなど、行動や身体の状態などから睡眠を定義する手法が取られています。しかしながら、ヘビの仲間にはまぶたがなく(目は透明な鱗で覆われているだけで、閉じることはできません)、四肢もないため、この手法では睡眠の判断が難しく、結果として睡眠に関する

水族館では 見ることができない生物

クロボシウミヘビとクロガシラウミヘビは、実は世界中のどこにも常設展示されていないヘビです。両種が属するウミヘビ属(*Hydrophis*)は、生涯を海洋で生活し、上陸することはありません。尾は船のオールのように平たくなっており、泳ぐのに適した体形となっています。また、多くのヘビやウミガメは陸上で産卵しますが、彼らは海中で仔ヘビを出産します。多くの点で海棲適応をしているウミヘビですが、そのほかの爬虫類と同様、呼吸だけは水面で空気を吸わなければなりません。

ウミヘビが餌を食べない！

上記の2種のウミヘビを飼育するに当たり、

最初に突き当たる困難はなかなか餌を食べてくれないことです。野生で食べている魚種になるべく近いものを用意与えてみるのですが、食べるどころか微動だにしないこともよくあります。あまりにも餌に対する反応が悪いので、「与えるタイミングが悪いのでは？」と考えるようになりました。私たち人間も、就寝中に起こされて食事を提供されても食べる気にはなりませんし、寝起きの時間帯も食欲は湧きません。また、陸生のヘビには、夜に活発になる種類がたくさん知られています。そこで、ウミヘビの活動時間帯を調べました。

ウミヘビの研究は あまり進んでいない？

海で撮りためたクロガシラウミヘビの写真を見返すと、朝でも昼でも深夜でも、活動して

図1.クロボシウミヘビの時刻別呼吸回数 ※中央値(全データの真ん中の値)を用いた簡略図

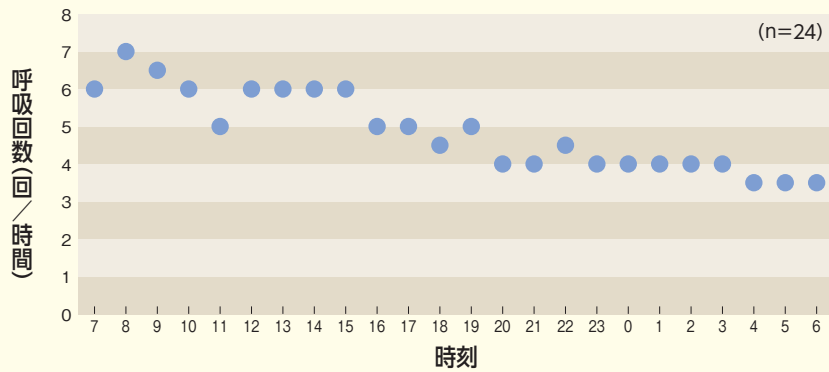


図2.クロボシウミヘビの昼夜における呼吸回数の比較(*は有意差有りの印)

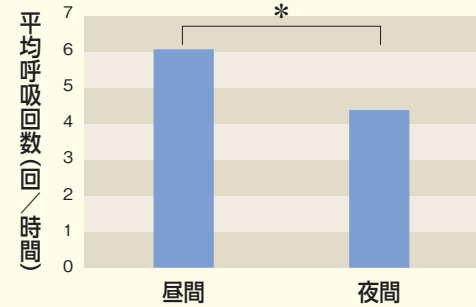


図3.クロガシラウミヘビの時刻別呼吸回数 ※中央値(全データの真ん中の値)を用いた簡略図

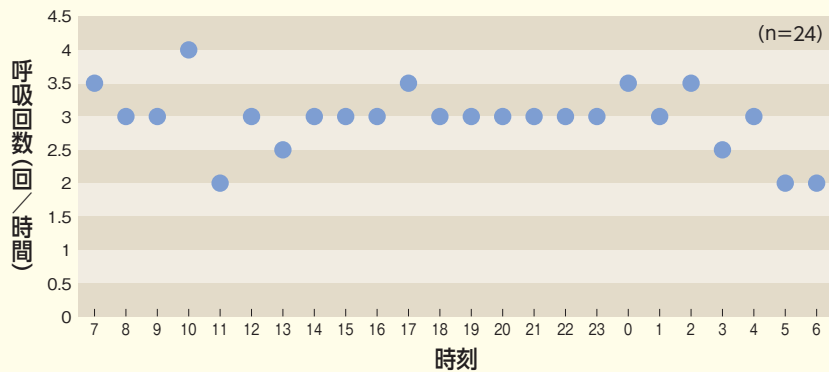
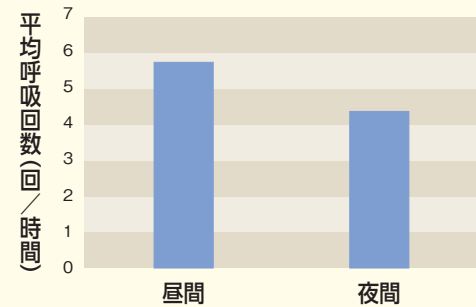


図4.クロガシラウミヘビの昼夜における呼吸回数の比較



る研究は進んでいません。また、活動中であっても獲物を待ち伏せするためにピクリとも動かないこともあり、行動の有無で判断することも困難です。

寝ている時は呼吸回数が減る?

冒頭でも述べたように、爬虫類であるウミヘビは海中で泳いでいても、呼吸の際には必ず水面に浮上し空気を吸います。そして、眠っている時や泳ぎ回らない時は酸素の消費量が減るので、呼吸回数が増える可能性があります。この呼吸頻度に着目することで睡眠時間帯や日周性を解明できるのではないかと思います。クロボシウミヘビとクロガシラウミヘビを幅2.5m、奥行き1.8m、高さ1.2m、水量5.4tの水槽に収容して、じっくりと観察することにしました。水温は25度に保ち、昼夜の時間を12時間ずつにするために、白色灯を12時間(7～19時)点灯し、爬虫類に見えにくいとされる赤色灯を24時間点灯しました。観察対象は各種3個体ずつで、尾の模様を用いて個体識別を行い、個体ごとに呼吸した時刻を記録しました。観察は2017年10月16日～12月1日に、3日間72時間連続を3セット行いました(ただし1日は機械不具合によりデータ未採取)。昼間は目視で観察を行い、夜間には高感度カメ

ラで動画を撮影し、後日解析を行いました。

呼吸回数に変化はあったが…

観察の結果、クロボシウミヘビの1日を通しての呼吸回数は、昼間の初期(朝)に最も多くなり、夜間にかけて徐々に減少しました(図1)。また、昼間全体と夜間全体の平均呼吸回数を比較すると、明確な差があるという結果になりました(図2)。このことから、クロボシウミヘビは昼間に活発に活動し、夜間に活動量が低下する種であることが明らかとなりました。これに対し、クロガシラウミヘビでは、1日を通して呼吸回数の変動が著しく(図3)、また昼間と夜間の平均呼吸回数を比較しても明確な差は見られないという結果になりました(図4)。このことから、クロガシラウミヘビの場合は、「昼間」「夜間」といったくりではどちらが活発に活動する時間帯なのかはわかりませんでした。ただし、午前11時頃と早朝の5時頃に呼吸回数の減少が見られるので、もしかしたら、短時間の睡眠を何度かに分けて取っているのかもしれない。

本当に睡眠なのか?

ここまで、「睡眠」というワードを使ってきましたが、実際のところ、本当に眠っているの

かどうかはわかりませんでした。呼吸回数が増えたタイミングで活動量が落ちているのは間違いはないのですが、果たして眠っているのか、休息しているだけなのか…。この点は今回の観察だけではわからず、追加の実験(活動時と非活動時に刺激を与えて反応速度を見るなど)が必要です。ただ、グラフからは読み取りにくいのですが、観察記録データを詳細に見ると、2時間程度一度も呼吸していない個体が複数いました。これはほぼ寝ているだろうと思っています。

最後に

「睡眠」という意味では、良い結果が出なかったようにも感じられますが、初めに抱いた「どの時間帯に餌をあげればいいのか」という疑問については、ある程度わかりやすい答えを得ることができたのではないかと思います。クロボシウミヘビは午前中に、クロガシラウミヘビは比較的活動量が多い午後には餌を与えれば食べてくれる確率が高くなるのではないかと考えられます。先行飼育事例のない生きものを飼育する時は、餌に何を、いつ、どの程度与えるのかといったことも手探りの状態から始まりますが、つぶさに観察することによってその答えが見えてくる場合があるのです。

ペンギンのリアル足型スタンプラリー実現に向けて ～未知なる足型を求めて～

現在、当園では海遊館、京都水族館と連携し、関西の3つの水族館を回ること、世界のペンギン全18種のリアルな足型を集めることができるスタンプラリーを実施しています。そのうち2種類の元となる足型を入手するため、海遊館、京都水族館のスタッフとともに関東へ向かいました。



↑キタイワトビペンギンの飼育エリア



↑当園のマゼランペンギンの足型採取の様子



↑独立した水槽で構成されたカワウソの展示エリア

まずは、神奈川県にある京急油壺マリンパークです。三浦半島に位置し、マグロで有名な町、三崎に水族館があります。最寄駅には館長と副館長が直々に迎えに来てくださり、一路水族館へ…と思いきや、車が向かった先はお寿司屋さん。なんと、三崎のマグロをごちそうしていただきました。一瞬出張に来た目的を忘れかける一同でしたが、おいしいマグロをいただいたからにはきっちり役目を果たさねばと気持ちを切り替え、水族館へ向かいました。足型を取るのキタイワトビペンギンという種です。この種はかつてイワトビペンギンという単一種にまとめられており、3亜種が存在すると考えられてきました。しかし近年ではキタイワトビペンギンとミナミイワトビペンギンの2種に分類されるという考えが主流で、キタイワトビペンギンはミナミイワトビペンギンに比べ冠羽(目の上に生えている飾り羽)が長く、体が大きいことが特徴です。飼育エリアは岩が連なって高くそびえ立ち、ペンギンたちが軽快なジャンプで岩を登る姿を見ることができます。足型採取は「ペンペン」という個体がモデルになってくれました。数年前に人工育雛(人の手で育てること)の様子がテレビ番組で放映され、一躍有名になったペンギンです。初めて見たり触れたりする物に全く物おじすることなく、落ち着いた足取りでスタンプ台を踏み、台紙にきれいな足跡を残してくれました。準備を始めてから足型が取れるまではものの10分。作業があまりにも早く終わってしまい拍子抜けでしたが、おかげでその後ゆっくりと館内を見ることができました。特に印象的だったのが「かわうその森」です。コツメカワウソの飼育エリアはいくつもの独立した水槽で構成されており、水槽ごとに展示の趣向が異なるのでカワウソの多彩な一面を観察することができます。カワウソの生態や魅力を大いに引き出すことができる展示環境となっていました。

続いてもう1種の足型を求め、東京都の恩賜上野動物園に向かいました。しかし、足型を取るの生きたペンギンではなく、剥製の

ガラパゴスペンギンです。実はガラパゴスペンギンはとても貴重な種で、ガラパゴス諸島にしか生息しておらず、世界的に見ても飼育はおろか、剥製でも所有している施設は少ないのです。剥製とはいえ、本物のガラパゴスペンギンを見ることができる!と私たちは興奮と期待に胸を躍らせました。剥製を見た瞬間には、一同スクープ記者ばりに一斉にシャッターを切ります。一通り撮影会が終わった後、足型採取に取り掛かりました。剥製は足が板に固定されているため、足の甲を粘土で型取りしました。こちら30分で作業終了、そして園内見学へ。あの一世を風靡した赤ちゃんパンダ「シャンシャン」を見に行くと、平日なのに「待ち時間30分」の表示。シャンシャンは両親よりは小さいものの、立派なジャイアントパンダに成長していました。黒白つながり、ペンギンとパンダを満喫した出張となりました。

今回、油壺マリンパークや上野動物園をはじめとするいくつかの施設にご協力をいただき、ペンギン18種の足型が集まりました。このプロジェクトをさらに盛り上げていく、さまざまな企画を用意しています。ぜひ、当園、海遊館、京都水族館を巡ってみてください。



↑ガラパゴスペンギンの剥製から足型を採取



↑上野動物園の人気者「シャンシャン」

小さな頃に思い描いた夢を次の世代につなげられるように…



海獣飼育課
川中真弓

PROFILE

1984年神戸市生まれ。専門学校在学中に、念願のイルカトレーナーに就職が決定。愛知県の南知多ビーチランドで6年半働き、その後2011年から当園へ。いつか大きくなった子どもに自分が出演しているライブを見てもらうのが密かな夢。

「イルカにサインを出したい!」。これがトレーナーを目指す一番の理由でした。小学校低学年の頃、某水族館のショーでステージへ上げてもらい、大きなイルカと実際に触れ合いました。イルカの何ともいえない表情のかわいさに心引かれ、ステージで活躍するお姉さんたちに憧れました。両親の影響もあって保育士や看護師に憧れていた時もありましたが、トレーナーを目指すようになってからはステージに立つこと、イルカにサインを出すことが夢であり、目標になりました。

夢であったトレーナーとなり、当園の人気アトラクションであるイルカライブに出演するようになってから1年余りがたちますが、当園で働き始めたのは約8年前です。当初はイルカのふれあいアトラクションを担当していました。お客さまとスタッフの距離がとて近くなるふれあいアトラクションで、特に気を付けていたのが「表情」です。お客さまのすぐ隣でお声掛けをするため、顔の表情だけではなく、声の表情にも気を付けました。不快な印象を与えないように、でも伝えなければいけないことはしっかりと伝わるように…言葉の選び方や強弱など、お客さまの反応を見ながらその都度変えられるように、言葉をたくさん引き出せるよう努力しました。

イルカチームに4年間所属し、それから営業課に異動しました。営業課は、来園したお客さま全員が最初に見るスタッフ、最初に接する部署でもあります。いわばスマスイの顔。ここでも「表情」の大切さが求められました。一方で、イルカチーム在籍時代とはまた違うお客さまとの関わり方がありました。イルカトレーナーとしてお客さまとお話をする機会はたくさんありましたが、そのほとんどが子どものお客さまでした。営業課では大人のお客さまと関わるのがほとんどです。性格的にフランクに話してしまう癖があったので、最初はきれいな日本語を話すことが本当に大変でした。ここでより丁寧なお



↑お客さまに楽しさが伝わるように…

声掛けや言葉遣いを意識するようになりました。異動してしばらくしてから、子どもを出産しました。周囲のサポートのおかげで育児に専念することができ、仕事にも無事復帰することができました。母になったからこそ気付くこと、見えるもの、感じるがありました。家族連れのお客さまが多く来園する当園で働くスタッフとして、母になったことは、とても意味があったように思います。

たくさんの経験をさせてもらった営業課から1年前に再度イルカチームへ異動し、イルカライブのステージに立つようになりました。若いトレーナーたちにもたくさんの刺激をもらいながら、トレーナーとして母として、まだまだ成長していきたいと思います!



↑幼い頃から何度も来園!



↑南知多ビーチランドでもショーに出演



亀崎博士の水族観

当園の学術研究統括である亀崎直樹が、園内のさまざまな水槽や生きものの見方を紹介・提案します。

ヒトデだって
喜ぶ時もある

そもそも、動物たるもの、動くのが普通と思うのが一般人の心理である。スマスイにはマヒトデがいる。しかし、このヒトデ、ほとんど動かない。そもそも、神経はあるのか? 一応、ありはする。でも、我々が持つような中枢神経はない。だから、大したことは考えてないだろうと思う。沖縄に住んでいる時、たまに夜の海を泳ぐことがあった。ある夜、何か異様な雰囲気を感じた。あちらこちらにアオヒトデという青い大きなヒトデが出てきている。みんな5本の腕で体の中心を持ち上げ、ある個体は卵を、ある個体は精子を体の中心から放出している。その時のヒトデは本当にうれしそうだった。やっぱりこいつらも動物だ。

水族園日誌

2019年1月～3月

1月

- 1日 お正月イベント「ラッコにおせち!お残しは許しませんで!」(~2日)
- 4日 スタウナギの仲間 展示開始
- 5日 和太鼓松村組とイルカライブの共演「光の暮新月」
- 10日 企画展「季節外れの金魚展」(~3月10日)
- 15日 カリフォルニアアシカ「ハヤト」展示開始
さかなライブ劇場リニューアルに向けカンディルの餌やり実演終了
- 19日 第4回スマスイ&海上保安庁コラボ企画
「愛します!守ります!神戸の海 神戸海上保安部 in スマスイ」
- 26日 スマスイ生きものスクール「イカをもっと知ろう!イカの解剖教室」
- 28日 動画投稿SNS「TikTok」公式アカウント開設

2月

- 1日 バレンタインイベント「ときめきバレンタイン in スマスイ」(~3月17日)
フリオネ 展示開始
- 2日 特別プログラム「ペンギンたちの食材運び観察会」
- 3日 イベント ラッコの明日花「ハッピーバースデー 祝20歳!」
- 4日 ミニ特別展「海からみた兵庫県〜二つの海にはさまれて〜」(~3月15日)
展示場所: 須磨区役所1階ギャラリースペース
- 8日 名古屋港水族館と生物交換 プロトアテルス・アンフィビウス受贈
- 10日 スマスイボランティアイベント「貝がらでおひなさまをつくろう」
イベント Blue Earth Project「プラスチックごみ削減(生物多様性保全・地球温暖化防止)-きれいな海と続く未来-」
- 16日 スマスイ生きものスクール「あなたも今日からサメ博士!サメの菌探し教室」
- 23日 スマスイ生きものスクール「ピラニア水槽のお掃除体験」
- 28日 カワウ 世界のさかな館にて展示再開

3月

- 1日 ロングノーズガー(42歳)世界最高齢記録更新
- 2日 イベント「第17回スマスイボランティアフェスタ」(~3日)
- 12日 碧南海浜水族館と生物交換 カゴカキダイなど譲渡(19日も)
- 16日 イベント「Permanent Fish スマスイオフィシャルパートナー卒業ライブ」
- 18日 伊勢夫婦岩ふれあい水族館と生物交換 ネコザメなど受贈 ポットベリシー
ホーム譲渡
世界淡水魚園水族館 アクア・トビと生物交換 マギナンベイウシガエル譲渡
- 21日 企画展「春らんまん!スマスイに咲くお花な生きものたち」(~4月21日)
イベント「スマスイ・エッグセレブレーション feat.ピンキー」(~4月21日)
- 23日 さかなライブ劇場リニューアル「お客様がエサになる第3弾」マグコの餌やり実演
追加
企画展「イルカライブ館オープン30年 -平成の時代とともに-」(~5月6日)
スマスイ生きものスクール「チリメンジャコの中のかいぶつを探そう!」
- 24日 「平成30年度スマスイ自然環境保全助成制度」成果報告会
- 29日 桂浜水族館と生物交換 土佐錦魚受贈 ピラニア・ナツペリ譲渡
- 31日 海遊館と生物交換 オオカミウオなど受贈 エソシカメレオンなど譲渡

夏のイベント情報

神戸賞受賞記念 春から夏はカメ、カメ、カメづくし企画

第9回神戸賞は、オオヨコクビガメという大型の淡水ガメが親子で鳴き交わしていることを明らかにした、ブラジルのCamila R. Ferrara博士が受賞。これを記念してカメづくし企画を開催します。



企画展

カメは春から夏に鳴く

この9年間、日本のカメ学をリードしてきた当園が取り組んできた活動の全てを紹介します。主役のカメも多数登場。

開催期間 ▶ 9月1日(日)まで

開催場所 ▶ 本館3階 水辺のふれあい遊園

スマスイサイエンスカフェ

第55弾「カメたちが見た自然のさま変わり -この数万年、数千年、数百年、数十年の間に 南の島で起こったこと-」

開催日時 ▶ 6月29日(土)18時~20時

講演者 ▶ 兵庫県立大学自然・環境科学研究所 太田英利教授

第56弾「アマゾンの自然と鳴くカメ」

開催日時 ▶ 7月6日(土)18時~20時

講演者 ▶ Wildlife Conservation Society Camila R. Ferrara博士

神戸賞

第9回神戸賞授賞式および記念講演会 「実は、カメは騒がしい動物だった」

開催日時 ▶ 7月7日(日)13時30分~(13時開場)

開催場所 ▶ ホテルオークラ神戸 1階 松風の間

参加費 ▶ 無料(事前申し込みが必要)

●各イベントの詳細についてはホームページでご確認ください

開園時間 ▶ 9時~17時(入園は閉園の1時間前まで)

※7月13日(土)から9月1日(日)は21時まで

休園日 ▶ 3月~11月/無休 12月~2月/水曜(祝休日、年末年始を除く)

※別途工事休園あり

スマスイ

検索

<http://sumasui.jp>